

は、「川の上流で奥地にもかかわらず開けた地形」を意味する時があるが、まさにこの地域は河内地形で、平坦な河川敷をヒエ田に開田し、急傾斜地での焼畑産の雑穀ヒエ・アワを補っていた。因みに稲作は太平洋戦争後まで皆無であった土地柄である。

副題で表記した「奥山人」とは、谷筋最奥居住者をさす。補足すれば奥山人は奥の地には人間が住んでいないということである。具体例で示せば、手取川本流での奥山人(最奥居住者)は旧白峰村白峰の人(河内・風嵐も白峰に属する)、尾添川では旧尾口村尾添と旧吉野谷村中宮の人々である。奥山人は、食糧は焼畑で雑穀を作って主穀とした。だが最低限の生活必需品を得るためには現金を稼がねばならない。そこで奥山人は、お金を稼ぐ場として周囲の山を生産の場・稼ぎの場としていた。繰り返すが最奥居住地に共通した利点は、自分らより奥地に人が住んでいないことである。だから居住地奥の最源流地の山々、別な表現をすれば大分水嶺(場所により県境分水嶺)までの広大な山地を思うままに利用できた。手取川本流の奥山人は、旧白峰村白峰の人、さらに白峰本村(ジゲ)より奥の「河内の衆」は究極の奥山人(最奥居住者)である。標高830mの市ノ瀬から2,702mの白山御前峰までの桁外れに広い山地には、森林資源(建築材・木製品の原木)・植物資源(山菜・薬草等)・動物資源(クマ・カモシカ・ウサギ等)・溪流資源(マス・イワナ・アマゴ)・鉱物資源さらには水資源(ワサビ田の水源)が内蔵されている。僅か40戸の河内奥山人をとりまく白山は、多様な山地資源を提供する場であった。稼ぎのため懸命に利用を計れば、山地が広大なため、私達の予想以上に稼げたのではないかと思う。最奥居住者奥山人をとりまく山地は、上流・中流の中途半端な山村よりは面積が広く、多様な稼ぎができる生産環境であった筈である。

大水害前、最奥居住地河内へは日本海よりマス(サクラマス)が遡上し、そのマスの残留型アマゴ、さらに上流域にはイワナが棲息していた。学術的にはサクラマス残留型をヤマメ、サツキマス残留型をアマゴという。だから河内というアマゴとは学術的にヤマメにあたるが、伝統的呼称は「アマゴ」で定着、さらに役場記録の漁獲高統計でも「アマゴ」を使っているのだから、以下アマゴとして記述することにした。また、淡水魚を数える単位として「匹」でなく「本」を使ってきた慣行があるので、以下「本」とする。マス・アマゴ・イワナは、河内領域内湯の

谷出合左岸にあった白山温泉旅館2戸の料理材料として重宝され、河内奥山人にとって現金収入の一部となって生計を助けていた。浴客は登山シーズン終了と共に急減、冷気の訪れも早いので閉湯時期も早い。この頃になると魚は売れなくなるので自家用蛋白源に利用。特に飯鮪や塩漬けにして越冬食糧の一つとした。大水害すなわち大土石流による被害は甚大で言語に絶するものであった。市ノ瀬と温泉場の全11戸は跡形もなく流失、赤岩20戸中13戸が流失した。三ツ谷に被害がなかったのが救いであった。本流・柳谷・湯の谷・宮谷の河床は土石流の堆積で上昇し、巨岩がゴロゴロ散布する河原に激変、瀬も淵もなくなった。大型のマスは下流へ流失、小型のアマゴ・イワナも流れ、一部は土石流のなかつた谷・沢へ遡上した。大土石流は溪流魚の棲息環境を破壊してしまつた。

この報告は、白山直下の河内の衆を含めた旧白峰村白峰の人々いわゆる奥山人が、大水害前後の頃におこなっていたマス・イワナの伝統的な捕獲技術と用具はどんなであったか、また溪流魚を貴重な現金収入源、さらには自家用食糧源としてどのように活用していたかに関して、稀少な残存資料をもとに、可能な限り具体的に把握することを意図した。

マス(サクラマス)

マスの生態

手取川は、白山を水源として旧白峰村を貫流、さらに尾添川・大日川等の支流の流れを集め、白山市美川町で日本海に注ぐ。流長は約66km、石川県下最長の一級河川である。源流の河内市ノ瀬は標高約830m、大水害前の河床は、適宜淵・瀬があった。そして温暖化進行以前であったので降雪量は現今より格段に多く、水量も豊かであった。河内の淵・瀬の特色は、柳谷・湯の谷上流は崩壊しやすい地質で裸地が多く保水力が乏しいのが影響し、融雪期と渇水期の流量変化が激しい。だから大樹の下、年中水を満々と溜めた淵が随所に見られるという景観は少なかった。つまり淵の多くない渓谷でマスの生育環境としては、決して良いとはいえない谷相であった。ここでいうマスとは、サケ属サケ科のサクラマスである。海より孵化した河川に戻って上流へ遡り、産卵して命を終える回遊性の強い魚である。山桜の咲く頃遡上を始め、秋には源流域で産卵、死んでしまう。卵は川底で越冬し、翌年の春に稚魚となり川で生活する。次年の春には10cm以上に成長し、美し

い小判状斑紋（パーマーク）をつけた幼魚ヤマメ（白山麓でいうアマゴ）となる。そして海に帰った時の脱水症状を防ぐため体表のパーマークを消して銀白色に変化させるスマルト化降海型と、そのままの体表を続けて川に留まる残留型に分かれる。降海したものは沿海、遠くはサハリン沖、オホーツク海まで回遊し、翌年春には約 3 kg、60cm前後のサクラマスとなって、母なる川へ戻ってくる。北海道、東北地方、さらに太平洋側では相模湾、日本海側では島根県以北に分布する。因みに、太平洋側神奈川県以南に分布するのはサツキマスで、長良川に遡上するものが著名で、サツキマスの残留型がアマゴである。手取川では 2～3 月にかけて遡上し始め、河内へは雪融け水にのるように遡上し 5 月中～下旬フジの花が咲く頃に遡上が終りとなる。9 月中～下旬より産卵場を探すようになり極限のマスドメまで遡上する。

マスの遡上限界は確定できなかったが、投網漁体験者の最上流漁場地は把握できた。湯の谷は名称のとおり、本流出合左岸に白山温泉、右岸に鳩の湯がありその余湯が流れこみ、出合上流河川敷にも温泉自噴地があるので遡上数が少なかったが、ゲンジコヨモ山（出作り地）直下の丸岡谷出合（約1,050m）までいった。柳谷は谷全体がもろく崩れやすく、谷筋に淵らしいものがなくマス・イワナの育成環境と



写真 1 三ツ谷西俣谷のマスドメ
谷全体が滝のようになり、マスはこれ以上のぼれなかった。今は発電所取水堰堤がある。

しては悪く猿壁以奥へはいかなかった。岩屋俣谷では三ツ石（約950m）以奥は効率が悪くいかなかった。三ツ谷川の遡上限界は確定できた。西俣には「マスドメ」（約850m）という地名がある位で（写真 1）、現在は水力発電所取水堰堤が施設されている場所である。東俣は小倉谷出合（約880m）まで、これより上流は水量が激減するためである。中俣は、谷が小さく水量も少なかったのでマスは遡らなかった。マスは、手取川河口標高 0 mより白山積迎岳直下湯の谷約1,050mの奥地まで遡り、その間約60kmの沿線の人々に海の幸を振り分けていたのである。因みにサケは、牛首川までは遡らなかった。

白山の呼称由来は、雪に覆われた真白な姿にある。別な表現をすれば白山は巨大な雪氷の貯蔵庫である。白山直下の河内は、急峻な地形、裸地の多い地表等が影響して保水力が弱く、雪融け水、雨水は減少し始めると急激である。雪融け水が急減し水量が少なくなった頃、マス遡上が終りをつける。獲ったマスは自家で食べるより殆どすべてを売ってお金にした。大水害前、湯の谷出合近くの左岸に加藤・山田の白山温泉旅館（写真 2）があり、そこで現金化した。マスの肉質の旨味は、新潟県三面川の漁師等によればサケとは比べものにならない程の高級とされる。山深い旅館では、マスを高級海魚として料理に使っていた。温泉旅館は冬場には閉鎖し、5月上旬に開湯、6月5日の菖蒲節供より本格営業にかかる。近隣の出作りは、焼畑の火入れ・播種作業の一連の春仕事が一段落したので、体休みと慰安を兼ねて入湯、さらに宿泊もする慣行があり、6月5日はその節目の日にあたる。河内のマス漁は、温泉の開湯・本格営業と深くつながっており、気の早い者は



写真 2 マス・イワナを多量に買いこんでくれた白山温泉（昭和 2 年石川県天然記念物調査報告第 3 輯より）



写真3 マス投網漁の鑑札(白山ろく民俗資料館蔵) 裏面に「大正十五年八月十三日」の発行年月日を記す。

5月下旬頃より始めた。自然暦ではコブシの花が満開の頃、フジの花が咲き始める頃よりマス漁にとりかかったという。漁は、投網をうって獲るのがおもで、^{やす} 稽で突く方法、さらに産卵期に^{かぎ} 鉤で引っ掛ける方法があった。投網には年2円50銭(大水害時3円)の鑑札(写真3)が必要であった。

マス漁

投網漁 投網とは、水中の魚を水上より、腕と体の回転力を使って網を円形に広げて、魚を覆い被せてとる漁具である。赤岩では自家栽培の麻(大麻)糸で網を編み、ナラ・クリの樹皮で染める。さらに鉛を融かして^{おもり} 錘を作る等自家製投網を作り使用していた。市販のものと比較すると麻糸が太いことが影響して2~3倍重く、約3~4貫(11.3~15kg)あったという。投網は、網の下裾を約1尺内側に折り返して、錘2個位の間隔で、細縄で折り返しを吊りあげて袋状とする。網にかかった魚はこの袋の中に閉じ込める仕組である。

白山ろく民俗資料館には、残念ながら河内で使った投網は現存しないが、下流の桑島集落山口務家で作ったマス用投網がある。これは、錘の形、糸の細さ等は精巧に作られており市販品である。裾は、長さ67mmの錘を16cm間隔で80個つけているので広がった最大外周は12.8m、直径に換算すると4.9mとなる。網の目は45mm、手綱は6.4m、全重量は約5.1kg(1.4貫)である。寄贈者山口務氏は使用体験がなく、父・祖父が使用したものという。資料館所蔵の投網は、マスが手取川を盛んに遡上していた時代の漁具として貴重資料といえよう。

シーズン始めは、淵のカケアガリを狙ってフチウ

チをした。マスは水温の低い所を好む。支流の流れ込む出合近くの淵や清水が湧いている淵は、幾分水温が冷たい。淵は深いので底部のマスは投網にかからないのでヤスに頼る。淵の上流部カケアガリは、新しく冷たい水が流れ込んでくるので、マスは夕方から早朝にかけて底から動いてくる。淵のカケアガリの水深は浅いので、そこで投網をうつのである。陸上岩の上から投網をうつ場合と、水中の足場の良い場所を選んでうつ場合がある。6月中の夜間の徒渉では体温が下がるので、時には流木を集めた焚火で、体を暖めなければならなかった。7月になると河川の水量も少なくなり、淵の水温は上昇・水深も浅くなって来る。マスは、暗くなると淵を出て流れの早い瀬に移り、明るくなると淵に戻る。瀬でも、穏やかな透明な流れより、泡が勢いよくたっている瀬のカシラ(頭)やシリ(尻)を狙って網をうつアワウチをした。夜、真っ暗であっても水泡は白いで狙いやすかったといい、アワウチは、もっぱら暗い時間帯におこなうヨアミ(夜網)をした。梅雨あがりの大雨で濁った水が増え、川幅も広くなる。また真夏の夕立の後も濁水が急増する。このような濁水が増え、それが減り始めた時が投網漁にとって最良環境となるので、「漁業を主とする者」も「漁業を従とする者」も、“川流れ”(溺死)に注意しながら競って網うちをした。増水時条件の良い時は昼夜を通して漁をした。鈴木と三松氏(明治34年生)は漁業を主としていた。一昼夜で6本獲ったのが最多で、この時は草鞋3足を履きつぶした。大正初期、夜のアワウチ漁1回で3~4本が普通、1回当り4~5円の稼ぎであった。獲れない時も稀にあった。大きいマスは2尺2~3寸~2尺5寸位、目方は1貫100匁が大きい方、小さいのは400匁位で、年間70~80本をとった。当時河内には漁業を主とする者が3組あった。夜の投網漁は、最小2~3人の組でおこなう。1人は照明用のヒノキタイマツを持ち、衣服や獲ったマスをリョウタビノ(写真4)に入れて担ぐ役をする。他は交互に網をうつ。自家製網は重く水を含むと3~4貫もある。時には腰位の深さの急流を徒渉しながらの漁である。闇の中流れに逆らうように足を踏ん張るので、昼間より倍以上に疲れた。網の裾が、川底の石に乗ると隙間ができマスが逃げる。それを防ぐため、他の1人は泡立つ瀬に飛び込み底の網を操作した。また、網にマスがかかると、飛び込んでマス・網諸共に抱えこんで陸揚げした。

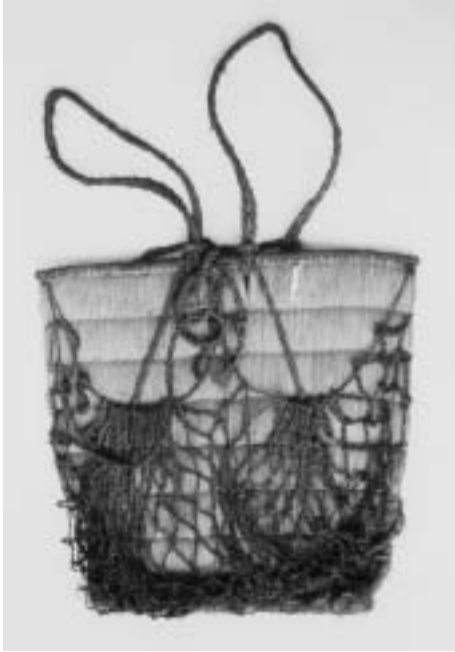


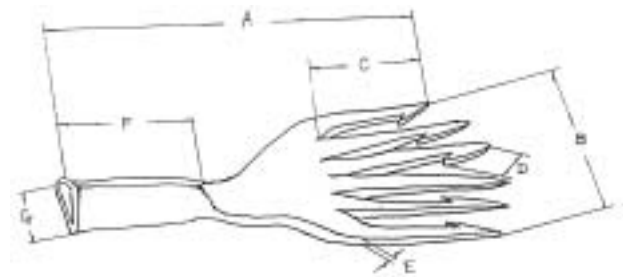
写真4 リョウタビノ（白山ろく民俗資料館蔵）
網の中へ、冬はウサギ・テン、夏はマスを入れてかつく

産卵期に入ったマスは「シロボケになった」といい、オバネ（尾びれ）やハネ（胸びれ）が白く擦切り状態になる。産卵場は水深が浅く、細かい砂利のある所で、雄が雌によりそうようにつく。雌は砂利に腹を擦りこんで産卵し雄はシラコ（精子）をかける。この卵を狙ってアマゴ・イワナが数本群がってくる。アマゴの雄がシラコをかけるものがあるらしく、イワナは卵を餌にするためという。投網にマスはかかるが、アマゴ・イワナは網目が粗いのでかからない。シロボケマスは、雄雌も腹は太く身の味は極端に悪くなるので旅館の買上価格は下ってくる。温泉の閉湯は9月末日なので、マスは売れなくなり漁は止めた。加藤政治家ではシロボケマス、さらに産卵直後の死んだマスは、食材として程度の良いものは利用したという。「死後程度の良いもの」という実態はどんなものなのか興味深い問題であるが、実際に検分できない。程度の良いものは人間、程度の劣るものは野生動物・鳥が食べていたわけだから、マスの食物連鎖が白山直下の河内でおこなわれていた。

河内の人々が、マス投網漁をおこなっていた領域は、クマ（ツキノワグマ）の狩猟テリトリーと全く無関係であった。クマの巻狩りについては、河内と白峰本村の領域境界は、左岸は小三谷、右岸は宮谷である。つまり河内の人々は、クマを追って小三谷や宮谷より下流域へはいけなかった。マス投網漁は、狩猟

テリトリーにとらわれず宮谷下流の大杉谷出合付近まで出漁していた。仮に投網漁を、一晩に岩屋俣谷出合より下流方向に狩猟テリトリー内の宮谷出合まで漁をした時は約4.5km、さらに白峰本村の領域内の大杉谷出合まで強行した時は約8.5kmの距離となり、狩猟域より4km白峰本村領域へ入りこんで漁撈をしていたわけである。関連して、河内の赤岩・市ノ瀬・三つ谷の各出作り群は、クマ巻狩りについては相互にテリトリーの線引きをおこなっていたが、マスを含んだ溪流漁については自由であった。源流域でのマス投網漁の他地域での事例については、雄物川水系桧木内川・秋田県西木村、雄物川水系役内川・秋田県雄勝町秋之宮（野本，1999）、さらに只見川水系伊南川・福島県只見町黒谷（佐々木，1997）等がある。そして伊南川の投網漁では白山直下の河内と同じく7～8月頃夜間におこなっていた。なお平地部河川のマス夜間投網漁では、秋田県雄物川、山形県最上川水系鮭川等（野本，1999）の事例報告がある。

猪漁 ヤスとは、長い柄の先に鋭利な細長状の鉄鉾をつけ水中のマスを突刺す漁具で、民俗資料館所蔵のもの（図2、写真5）は鉾3条のもの1本、鉾5条のもの2本があり、どれも地元の鍛冶屋製である。柄との接合部は、袋状にして差し込む型、袋状にせず板状にして釘と紐で固定する型がある。淵での潜水漁は3条鉾のものを使用、鉾は魚体に刺さり易いように細く鋭く仕込んである。資料館所蔵のものは、いずれも柄付きのものがないので、柄の材質や長さは不明である。人が淵に潜ると、マスは底の岩の割れ目、石と石の間、根株の隙間に逃げこむ。それを



ヤスの種類	A全長 mm	B鉾の全幅	C鉾先の長さ	D逆鉾先	E鉾の厚さ	F接合部 G袋型	重量 g
マス見突用 ヤス・5条	275	167	長 150 短 145	57	11	袋型 85×33	1020
マス見突用 ヤス・5条	306	134	長 142 短 127	36	13	袋型 104×40	1320
マス潜水用 ヤス・3条	300	92	204	63	10	板型 123×25	450
ゴリ(カジカ)用 ヤス・3条	283	59	153	23	8	袋型 82×25	230

（白山ろく民俗資料館の調査カードより）

図2 白山ろく民俗資料館収蔵の猪



写真5 マス用ヤス（白山ろく民俗資料館蔵）
上は潜水用，下はスリマス用



写真6 マス用力ガキの使用法
（国文学研究資料館蔵『日本捕魚図志』より）

突くのである。潜水用ヤスには、鉾が突刺さった時に離れて魚体に残るように鉾に紐をつけたものが、三面川（田口, 1984）、只見川（佐々木, 1997）最上川水系白川（野本, 1999）で報告されているが手取川にはなかった。産卵期雄は尾パネで砂利を掘り、雌が腹を砂利に擦る状態になるのでスリマスといい、淵のマスより突き易かった。スリマスの動きは幾分敏捷でなくなる。さらに夜は鈍くなるので松明を使ってのヤス漁ヨガキをした。その場合、ヤスは水中で操作するのでなく、陸上より水中のマスを見定め、突き下ろすよう刺す。太い鉾が魚体を通して川底に達しても、そのままヤスを固定してマスの動きを止めるように扱った。

鉤漁 白峰村のカギとは、マスを引き掛ける鉄製鉤を2条つけ、持ち運びが便利のように二つ折にできるようにして、漁場では伸ばして使う漁具である（図3）。資料館へ寄贈時、使用者は他界された後であり、調査原票には「ヤス」と記してあるが「カギ」と言っていたと思われる。このカギの漁法は、使用者他界のため分らなかったが、農商務省水産局纂『日本水産捕採誌』下巻（1910）では、これと同型の漁具を「摩鉤」と命名、その技法を記録、さらに『日本捕魚図志』では挿絵入りで技法を紹介してい

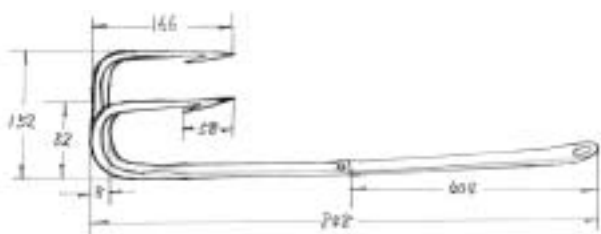


図3 白山ろく民俗資料館蔵のマス鉤（単位ミリ）

る（写真6）。それによれば、この漁具は産卵期のマス、地元でいうスリマスに限って使用する。砂利の多い産卵場スリバ、時には漁のため人工的に砂利を敷きつめたスリバの川底に置く。引縄を小石で押さえ、マスがくるのを待ち伏せする。マスを発見すると急に縄を引張って鉾で魚体を引掛け、逃がさぬように急ぎ川中に走りこんで捕獲する漁法である。寄贈者は、川沿いの居住者でなく有形山（1,010.7m）東面標高850m藤部ニサ山の出作りである。この漁具で漁をするためには、出作りの小屋場から牛首川本流までは30°位の急傾斜地高低差約250mを下らねばならない。漁場は本流助内谷出合付近と思われる。産卵期には、秋の雑穀収穫・乾燥・調理作業等の多忙な中、足繁く急坂を登り下りしてマス獲りをしていたと推察する。マスの産卵は極源の源流域でもおこなうと聞いていたが、鉤の使用地助内谷出合付近は、河内市ノ瀬より約6km下流であり、ここでも産卵していた証といえよう。同類の鉤を産卵場に置いて引掛けてマスを獲る漁法については、只見川のオキカギ漁（佐々木, 1997）の報告がある。

源流域におけるマス漁技術の系譜

白山直下河内の渓谷流は、平野の流れより格段に急流の筈である。河内のマス漁の主流は投網で、さらには稽漁・鉤漁もあった。急流で徒渉しながら投網をうったり、片手に稽を持って淵に潜ったりするのは、渓流での高い技術をもっていたから可能なことである。深雪地の奥山人は、狩猟のため、急傾斜地・雪氷に対する技術は必須、さらに渓谷での淡水漁のため泳ぐ・潜る技術も必要となる。慣習として年長者は、次世代を幼少期には雪氷の山でのウサ

ギ猟・渓谷でのイワナ漁に引っ張り込んでその技術を体得させ、その体験の積み重ねでより上級のクマ猟・マス漁へと対応できる能力・技術を習得させるよう試みてきた。

鈴木牧之は、江戸時代文政期の著述『秋山記行』前倉集落の段で、「抑 此橋前後半道ばかりの所は、深淵限りなき水底数々故、鱒・岩魚の類の栖にて、彼の秋山を住居とする秋田獵師は、此水底へ潜り、鍵にて取る事、妙手を得たりとなん。」と書き、中津川源流の潜水鉤漁を絶賛し、この技法は秋田獵師が伝えたことにも触れている。古くより、猟をする者は漁をするのにも長けていた。新潟県入広瀬村大白川新田の住安嘉裕家所蔵の「捕鱒の図」は、明治初期の平石川でのマス集団漁を描いたもので、最上孝敬氏により最初に紹介された（最上，1966）。大白川新田は平石川最奥集落で、ここでいう「奥山人」にふさわしく、また狩猟をする者が多い土地柄である。描写から「潜り漁」が単純でないことが分る（写真7，8）。具体的には左手に石を抱き深い淵に潜る技法、潜った二人が引っ掛け鉤を向い合わせて獲る技法、深く潜って体の上を通り過ぎるマスを獲得する技法、潜って岩の割目や岩下に隠れるマスを獲得する技法等である（佐々木，1997）。地形が複雑な渓谷の淵に棲息するマスの様々な生態に応じた技法、集団漁により先祖から伝授された伝統技法が如実に描かれている。溪流淵での潜水漁は単純ではないのである。

源流域には、マスより大型のサケは遡上してこない。毎春回遊してくるマスは、在来のイワナより大きく獲りがいいがあるので、用具・技法を工夫して獲



写真7 新潟県平石川でのマス潜水漁その1
二人向きあって引っ掛けカギでマスを獲得。
入広瀬村（現魚沼市）大白川新田，住安嘉裕氏蔵「捕鱒の図」より，部分図

っていた。先人の調査をもとに4地域の源流域を含めた上流域漁法を紹介し、手取川のそれと比較したのが表1である。4地域共に日本海に注ぐ河川源流域で、秋田県西木村戸沢，新潟県朝日村奥三面，石川県白峰村白峰・河内は谷筋最奥地である。その居住者は、ここでいう「奥山人」であり、共通してマス漁従事者が狩猟をおこなう土地柄である。

日本海沿岸河川におけるマスの回遊・遡上数は、マスが寒流系の魚であるため、緯度の高い北方の川ほど多くなるのは利の当然である。北方の雄物川・桧木内川，三面川，阿賀野川・只見川等の遡上数は、それより以南の手取川と比較すれば遥かに多く、特に雄物川・桧木内川は桁外れに多かったと思われる。桧木内川のマス漁では、遡上数が多いので原始的な蒥・鉤・釜でも獲れるが、より効率的な網漁へと進化していた。さらに漁をする主体が個人漁・2～3人漁より集団漁へと発展していた実態があった。桧木内川小山田地区では、セコ10人がマスを瀬より淵に追込み、その淵を巻網で囲み、熟練者が二人向きあってマス鉤を操る組を5組作ってマスを獲り、一つの淵で約40本のマスを獲ったという（野本，1999）。この鉤と巻網を併用した集団的マス漁は、東北地方のマタギ等にみられる小集団によるツキノ



写真8 平石川でのマス潜水漁その2
淵の底へ石を抱いてもぐり、体の上へ泳ぎきたマスを下より、カギで引っ掛ける。「捕鱒の図」より，部分図

表1 上流域マス漁の漁法一覧

	桧木内川 秋田県西木村戸沢等	三面川 新潟県朝日村三面等	只見川 福島県只見町・南郷村	中津川・秋山郷 新潟県津南町大赤沢等	手取川 石川県白峰村白峰
ヤス 潜水して突く		カサヤス フクロヤス			
ヤス 岸から突く		ホリマスヤス フクロヤス			
カギ 潜水してひっかく		テンカラカギ カギ	ヒッカケ オキカギ		
ドウ (笠)		サゲドウ ノボリドウ		植物製マスカゴ 金属製ハネカゴ	
投網					
網	巻網 刺網 追い込み網	エグリ網 モツデ網	引網 滝ノツリアミ		
毒流し		ネモミ (クルミの根)			
文献	野本寛一(1999)	朝日村の民俗(1978) 赤羽正春(1999)	佐々木長生(1997)	野本寛一(1996)	

巻網・エグリ網・モツデ網は、上流より中流と位置付けした方がよいかも知れない。

ワグマ共同狩猟の形に似ているように思う。三面川支流高根川高根地区の集団漁は、総勢50人程で河原のクルミの根を掘り、淵の上流部で根を一斉に叩いて揉み、黄色の液を流しこむ。淵の下流部で稽を持って突きさす漁法で、1回の毒流しで下流1kmまで漁をおこない、マスの分配は参加者に平等に分けていた(赤羽, 1999)。平石川大白川新田地区では、最初の集団漁カギノクチアケでは、引っ掛け鉤を持ち淵に潜る者、待ち構える所へ石を投げてマスを追い込む者、淵のまわりには石の散在はないのでその石を運ぶ者、マスの退路をさえぎる網を張る者、着衣・弁当を持ち歩く者、冷えた体を暖めるため流木を集め焚火をする者等大勢でとりおこなう。参加した子供は大人と同じようにマスの分配を受け、さらに喜びと技術を享受できた。

マス漁獲高の激減

白山市白峰支所(旧白峰村役場)所蔵文書閲覧の便宜を受け、淡水漁業に関する資料を探索した結果、連続した暦年統計は見当らなかったが、明治末期、大正期、昭和初期のマス・イワナ・アマゴの漁獲高とその増減についての概要はつかめたと思う(表2)。マス最多漁獲高は大正11年の334貫、次いで大正10年325貫、大正13年257貫と続く。最小は昭和9・10年の1貫である。つまり大正11年をピークに減少の一途を辿る。分り易くするため、マス1本の平均的重さを700匁とすれば最多年の334貫は477本に相当する。最少年の1貫を1本500匁と換算すれば2本、特大の1貫と換算すれば1本しか捕れなかったことになる。マス漁獲高の漸減に役場は危機感をもった。昭和3年は94貫となり最盛期の28%となっ

た。県への漁獲高報告書に「本村ヲ貫流スル手取川ノ下流ニ於テ水力発電事業ノタメ各所ニ堰堤開門等ノ工作物設置スルモノ多キヲ以テ鱒類ノ遡上防ゲタル結果鱒ノ欄非常ニ減額」という添付文をつけている。

大水害発生は昭和9年7月11日。水害発生半年前の昭和9年2月1日付漁獲高報告書では、マスが5貫に激減したことをふまえ、次のような訴状を石川県知事山口安憲宛に提出した。「本表記載ノ鱒及アマゴノ累年ノ統計ニ示ス如ク年々減獲セラル、殊ニ本年ニ於テハ言語ニ絶スル悲惨ナル実況ニテ原因ハ多クアルト考エラルモ主ニ手取川・牛首川ニ設ケタル数ヶ所ノ発電所引水堰堤ノ魚道不完全ナルモノ其原因ト考察セラル固ヨリ発電事業モ国家主要事業ノ一ニシテ助成奨励スルモ亦地方ニ於ケル天恵ノ水産物ノ斯ル惨状ニシテ我々山間住民ノ栄養上殊ニ考慮サレンコト...以後省略」。訴状は、終末の肝心要のところ上で級機関への施策を要望することなく竜頭蛇尾になっている。しかし、公共開発のため、奥山人のマス漁が犠牲不振となり、収入・栄養上で問題が発生したことの事態を上級機関に果敢に提出しているのは、当時の社会・政治情勢のもとでは稀少事例と思われる。因みに昭和9年大水害以前に、本流に取水堰堤を設けた発電所とその完成年は次のようである。明治44年福岡第一発電所、大正10年吉野第一発電所、昭和3年鳥越発電所、昭和5年吉野第二発電所。つまり、マス漁獲高が大正10年代より漸減するのは、県への訴状に記すように発電所に付属する取水堰堤建設にともなう魚道の不完全さが最大因で、マスの遡上が少なくなったのである。すなわち河川の公共開発事業のため、奥山人の淡水漁撈が影

表2 石川県白峰村の淡水魚漁獲高

年次	マス		イワナ		アマゴ		その他
	漁獲高 貫	金額 円	漁獲高 貫	金額 円	漁獲高 貫	金額 円	
明治 38年	85	127.5	110	132	50	65	アユ 円 324.5
40	200	300	120	156	70	91	アユ 547
41	60	102	130	169	20	28	アユ 299
大正 元	90	180	90	144	45	72	本流に明治44年福岡 第1発電所取水堰堤
5	140	252		アマゴを含む 368			
6	210	378		アマゴを含む 400			漁業を主3戸 漁業を従33戸
7	90	180		アマゴを含む 400			漁業を主3戸 漁業を従35戸
8	160	432		アマゴを含む 450			漁業を主3戸 漁業を従34戸
9	180	810		アマゴを含む 720			漁業を主2戸 漁業を従36戸
10	325	1300	アマゴを含む 250	アマゴを含む 1125			本流に吉野第1発電 所取水堰堤
11	334	1503	アマゴを含む 275	アマゴを含む 1238			
12	163	978	アマゴを含む 277	アマゴを含む 1385			
13	257	1275	アマゴを含む 275	アマゴを含む 1375			
昭和 2	131	786	アマゴを含む 230	アマゴを含む 1380			
3	94	324	アマゴを含む 214	アマゴを含む 1284			本流に鳥越発電所取 水堰堤
4	154	847	113	678	147	882	
5	87	522	164	984	105	630	本流に吉野第2発電 所取水堰堤
6	48	288	268	1608	117	702	
7	47	282	348	1914	61	336	
8	5	20	228	1140	50	252	
9	1	5	223	1115	59	295	
10	1	5	アマゴを含む 43	アマゴを含む 215			

白山市白峰支所蔵の統計より抜粋。「漁業を主」とは「漁業を主とする者」、「漁業を従」とは「漁業を従とする者」をさす。いずれも役場記録の語彙

響を被り、河内の場合はマスを温泉旅館で換金していたので現金稼ぎが少なくなったのである。これに追討ちをかけるように昭和9年7月11日早朝、湯の谷に大土石流が発生、市ノ瀬11戸全部、赤岩20戸中13戸が流失した。本流河川敷は約80m上昇し河床は一変、淵・瀬はなくなった（加藤、1986）。その結果昭和10年の漁獲高はマス1貫、アマゴ・イワナ合わせて43貫と激減した。数字は大水害の物凄さを如実に語っている。河内のマス漁は、発電所取水堰堤

という人為的障害と、未曾有の大水害という自然災害によって昭和9年に消滅状態となってしまった。

マスの調理

マスは白山直下の河内では最大の魚で、イワナより桁外れで大きい。旅館へ売の際はマス・イワナ共に重さで金額を決めるので、マスはイワナより割が良く、獲ったものは自家用にせず換金した。産卵期のマス、産卵直後のマスは自家用に、基本的に塩蔵、

または飯鮓にして冬場の重要な蛋白源とし保存食の一部としていた。河内のマスは、旅館も地元作りも、魚料理に共通する刺身、焼魚、煮魚、塩魚にして食べた。

刺身 河内へ遡ってきた直ぐのものは食べた。水温があがるにしたがい「生臭くなる」「シラミがつく」「ミミズのような細長い虫がわく」として生で食べない。シラミとはサカナジラミと思われる。水温が上昇するとマス・イワナ等の淡水魚の表皮やひれの付けねに吸着して、体液を吸う微細な虫で、水温が低くなると外れてしまう。手で除去したり熱処理すれば問題はない。ミミズのような細長い虫とは、寄生虫サカナサナダムシと思われる。サカナサナダムシについては、奥州藤原氏の居館遺跡柳之御所の発掘で、トイレ跡よりサカナサナダムシの卵が発見され、北上川を遡上するサクラマスを生そのまま食べ、それが人間に寄生していたらしいとして注目された。

焼魚 塩焼きは手数もかからず、サケより旨いというマスの味を引出させて最高であった。旅館は切身にして、作りは豪快に輪切りにして焼いていた。

煮魚 マスの調理というより大根を煮る時にマスを入れると、大根にマスの味が移って旨くなり、御馳走の一つであった。

塩マスとサカナフロ 産卵期のマスは、旅館がヤスピキ(安引き)で買ってくれる時は売ったが、売れなかった時は塩マスにして保存した。河内は、日用品流通ルートの最奥地であり、家数も50戸に満たないので生魚が届くのは、春先の日本海産の鰯だけで、身欠き鮓・焼鮓が細々と移入されていた。だから売れなかった産卵期のマス、さらには死直後のマスは、貴重な自家用食材であった。市販の塩マスは丸1本のままのものが多く、河内では適宜の大きさに切り、塩をまぶしてから木製収納箱サカナフロに並べて、越冬用に保存した。サカナフロとは、端的には杉板製の蓋付き箱である。白山ろく民俗資料館には現物がない。赤岩・加藤政治家の箱の規模は、縦1尺、横1尺5寸、深さ1尺位の大きさであったという(図4)。保存中水分がでるので片方側底板に小さい穴をあける。穴の反対側底板に棧を打ちつけ、少し傾いた状態にしておく。加藤家では、底にササの葉を敷きつめ、塩マスを約10~20本を入れて貯えた。時には、丸ごとのイワナ・アマゴも貯えた。

マスの越冬用保存法としては、新潟県三面川流域では、塩マスをトチの葉と稲藁で包んで保存する

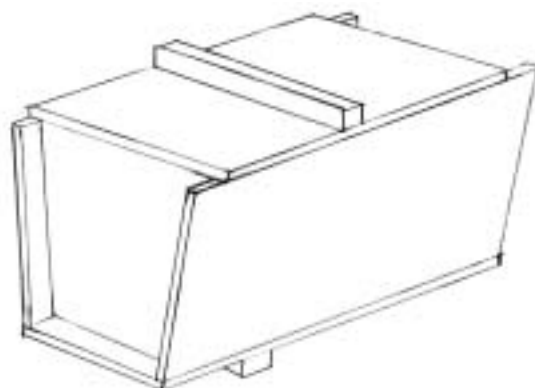


図4 サカナフロ復元図

民俗資料館の各種収納具の木組みを参考にして復元した

というアラマキという技法がある(田口, 1984)。また福島県只見川源流域では、塩マスを薫製にして保存している(佐々木, 1997)。白山直下の河内では、サカナフロという木箱で、魚肉の劣ったマスを塩マスに加工、それを保存した。残念なことにサカナフロの現物はない。何ら変哲のない木箱であるが、奥山生活者が冬の蛋白源に執着して創った生活道具として注目すべきであろう。

押し鮓 河内でいう「マスの押し鮓」とは、重さを効かした飯鮓である。正月用にどの家々もした。

1. 普通の家ではシオマス5, 6本を塩出しして食べやすいように切身にする。北陸の飯鮓には野菜を多く入れる傾向があり、河内でも輪切りまた千切りダイコン、色添えにニンジン、刻みショウガを混ぜる家もある。塩出しや混ぜ物の準備等に1週間程かかる。
2. 桶の口と底の直径が同じ寸法いわゆるずん胴型の桶を使う。底にササの葉を敷き塩を薄くまく。その上にご飯(米10割の純粋な飯)を敷きつめ、さらにその上にマス・ダイコン・ニンジン・ショウガを並べ置き、少量の塩をまく。このような方法でササの葉・ご飯・マス・野菜を幾重にも漬けていく。
3. 一番上にササの葉を多目に被せ、木蓋をのせ、オモシ(重石)を利かし醗酵を待つ。麹や酢をまったく使用しないので、醗酵には長い時間を必要とするので、正月の約1か月前に漬けてまねばならない。
4. シタジ(漬物汁)が木蓋の上にあがってくると汲んで捨てる。
5. 大晦日が近づくと「逆サ重シ」をする。漬物桶の最上部のオモシを取り除き、桶全体を逆さにし

の殆んどを旅館に売っていたという実態は、林家の大福帳よりも裏付けられる。

正月にマスの押し鮓を食べる習慣は前述した。さらに秋祭り、九月節供という折り目にも、塩マスがハレの食材になっていた。古くは生マスであったのでないか。秋のマスは味は劣るが源流まで遡ってきた海の幸を儀礼食として使ってきた証といえよう。三ツ谷のマス漁「今ジク山」の構成員はそのまま冬場の「巻倉」すなわち狩猟の仲間であった。このようにマス漁をする者は狩猟もおこなっていた土地として、前述した秋山郷、新潟県入広瀬村大白川(最上, 1966), 新潟県朝日村奥三面(田口, 1984), 秋田県西木村戸沢・中泊(野本, 1999)等が報告されている。

文 献

- 赤羽正春(1999)河川開発と民俗変容 - 三面川を中心に - .
ブナ林の民俗, 高志書院, 179 - 199 .
- 白山総合学術書編集委員会(1992)手取川上流域の自然と魚類 . 白山 - 自然と文化 - , 北國新聞社, 273 - 284 .
- 井川雑穀文化調査委員会(2004)井川雑穀文化調査報告書, 静岡市教育委員会, 109 - 114 .
- 池上鋼也郎(1935)白山連峰と渓谷, 宇都宮書店, 319 - 324 .
- 加藤政則(1986)白山の埋み火 - 白峰村河内の存亡史 - , 川上御前社跡保存会, 98 . 99 . 284 .
- 最上孝敬(1966)川潜り漁のこと - 新潟県入広瀬村大白川 - . 西郊民俗39, 西郊民俗談話会, 1 - 7 .
- 最上孝敬(1967)原始漁法の民俗, 岩崎美術社, 220 - 233 .
- 新潟県朝日村教育委員会(1978)三面川の川漁 . 民俗文化財緊急調査報告朝日村 , 朝日村役場, 217 - 230 .
- 日本捕魚図志(和本). 国文学研究資料館蔵(作者・年代不明)
- 野本寛一(1996)始原生業複合論 - 秋山郷・伊那谷から - . 信濃, 48 - 1, 信濃史談会, 33 - 61 .
- 野本寛一(1999)サケ・マスをめぐる民俗構造 . 民俗文化, 11, 近畿大学民俗学研究所, 11 - 121 .
- 農商務省水産局纂(1910). 日本水産捕採誌 下巻, 農商務省水産局, 50 . 51 . 71 . 72 .
- 佐々木長生(1997)只見川上源流域における鱒漁について . 民具研究, 115, 日本民具学会, 29 - 45 .
- 白水 智(2005)知られざる日本・山村の語る歴史世界, 日本放送出版協会, 67 - 95 .
- 白峰村史編纂委員会(1991)白峰村の水産業 . 白峰村史第3巻, 白峰村役場, 370 - 372 .
- 鈴木牧之・宮栄二校注(1971)秋山記行・夜職草, 平凡社, 140 . 144 .
- 田口洋美(1984)川獵 . 山に生かされた日々 朝日村奥三面の生活誌, 山に生かされた日々刊行委員会, 116 - 119 . 126 . 127 .